
桐宮兄妹と超能力の世界

BRISINGR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桐宮兄妹と超能力の世界

【Nコード】

N8931U

【作者名】

BRISINGR

【あらすじ】

桐宮兄妹は『アレ』が大嫌いで兄が大好きな妹・奏かなでとそんな奏を第一に考える兄・湊みなと。ある日、湊と奏は登校している途中で異世界トリップしてしまった。トリップした先は『超能力』というものが当たり前のように使われている異世界。そして、異世界人所以か自分たちにも発現した超能力は珍しくて扱い勝手の良いのか悪いのか分からないチート能力だった。『第1章 サンテリア学園・編入編』を掲載中。

第1話　いつもの朝

朝5時。

きりみやみなと
桐宮湊は自分のベッドの上で目を覚ました。

まだ完全に目を覚ましていない身体を起こすために、両手を上に上げてぐぐつと背を大きく反らす。

寝巻からランニングウェアと短パンに着替えて部屋を出た。

「あ、兄さん、おはようございます」

声が出た方を見れば、湊と同じタイミングで部屋を出たのか、1つ歳下の妹の奏かなでがいた。奏もランニングウェアと短パンを着ている。

「奏、おはよう」

それだけの言葉を交わすと、階段を降りて玄関に向かった。靴紐を結び、地面につま先をとんと叩いて靴を履いた。

まだ太陽が昇ったばかりの外に出て、いつものランニングコースを走り始める。

「今日は風が気持ちいいですね」

そう言う奏の長い黒髪が後ろに流れる。

「ああ、そっだな」

その後の2人は黙って走り始めた。
途中で、朝のランニングをする女性とすれ違う。

いつも通りの兄妹のランニング。

ランニングコースを走り終わった2人は家に着く。

「今日は1人もすれ違わなかったな」

「そうですね。本当によかったです」

ランニング後のこの会話もいつもの日常。

湊はランニングでかいた汗をシャワーで落とし、制服を着てリビングに向かう。先に浴びている奏と寝癖なのか髪がはねている母親が朝食をつくっている。

女性2人が料理をつくっているのは、男の出る幕はないので、食器棚から箸やコップなどを出して席につく。

10分後くらいには、テーブルの上には和食が並んだ。

湊と奏はそれらを手早く食べて、学校の支度を始めた。とは言っても、荷物を確認するだけなのだが。

電車の時間には充分に間に合う時間に玄関にいるの2人はそれぞれ荷物を持つ。

母親は寝癖ではねた髪と格闘中。

「それじゃあ、兄さん。行きましょうか」

「そうだな。今の時間なら電車には間に合う」

「そ、それで……あの……いいですか？」

普通なら訳のわからない日本語だが、生憎とその言葉を向けられている湊は奏の言いたいことと顔を赤くしている理由がわかっていた。

湊は小さく微笑むと、右手を差し出す。

「はう……っ」

その微笑みだけで顔を真っ赤にしてしまうのに、さらにその右腕を出す意味で、奏の顔はもう噴火寸前だった。

しかし、間違っではいけないのは、湊が出したのは右手であって右腕ではないということ。

我慢し切れないといった感じで奏が湊の右腕に飛びつく。

飛びつかれた湊は、右腕じゃなくて右手なんだが……、と思っっているが右腕にピタリと身体を張り付ける奏を今更どうすることもできない。

「奏、いつかは慣れてくれよ。いつまでもこういうことはできないんだから」

「無理ですよ。『アレ』は私の天敵なんですから」

「そんなんじゃない、社会で生きていけないぞ。ホントに真剣な意味で」

「じゃあ『アレ』が絶対に関わらない仕事に就きます」

「奏が言う『あれ』がない職場なんてそうそうないと思うんだが」

「うっ……………あ、ありますよ……………」

「例えば？」

「そ、それは……………とにかく世界のどこかにはあるはずです!」

「そんな夢のような仕事が見つかるといいな。無理だと思うけど」

「うっ……………じゃあ、仕事しません。私は専業主婦になります……………は
うっ」

自分で口走った言葉から何を想像したのか、奏の顔が赤くなる。

ここで「誰の専業主婦なんだ？」なんて野暮な質問はしない。返つて来る答えは1つに決まっている。

それに、

「も、もちろんに、兄さんの専業主婦という意味ですよ」

質問する前に答えが返って来るからだ。

顔を真っ赤にしながら告白する奏に、湊は小さくため息をついた。

「俺以外の専業主婦になるつもりはないのか？」

「ありません。兄さん以外の専業主婦なんて有り得ませんよ」

「……一応、言つとくが、俺は『アレ』なんだぞ？」

「兄さんは例外です」

にっこり笑顔で言う奏。

これをされてしまったては、湊に返せる言葉はない。

その後、2人はドアを開けて外に出た。

端から見れば、湊と奏が歩く姿は恋人同士のように見える。女性の方が男性の右腕に抱き着くようにしているのだから当たり前である。朝っぱらから見せつける2人は周囲から少なからず視線を集めるだろう。

しかし、お化け屋敷の中を歩くように、彼女の方が恐怖で顔を歪ませながら歩いていたらどうだろうか？

「兄さん………」

両目に涙を潤ませた奏が上目使いで自分の兄を見る。

世の中の男性ならくらくたとくるような攻撃だが、毎朝それをやられ

ている湊は既に耐性ができている。

「我慢だ。耐えるんだ、奏」

「む、無理です……………うきゃうつ！？ににに、兄さん！！後ろから『アレ』がこつちを見ましたよ！！確実に見ました！！背筋がゾォツと寒気が走りました！！」

恐怖で泣き叫ぶ寸前の奏が密着している身体をさらに右腕に密着させた。

右腕から2つの膨らみが押し付けられる感覚が伝わってくるが、これも毎朝のことです湊には耐性ができている。

湊としては、やんわりとそのことを指摘して、奏を引き離したいが、そういうわけにはいかない。引き離したら引き離したで、状況は悪化するだけ。

「もうすぐで駅だ。駅に着いたら舞^{まい}もいるから、それまで我慢しよう。駅まで我慢したら記録更新だ」

「ははは、はい……………！」

湊の声援に少しだけ落ち着きを取り戻す奏は絶対に放すもんかときぎゅっと右腕を強く抱き締める。

もう、ミシミシ、という静かな音が右腕から鳴っているほどに。

人が命の危険になるときに発揮する力は通常の何倍にもなる。今の奏もその例に含まれる。

一方、自分の右腕から危険信号が発せられていることに気付いた湊は、どうすることもできずに冷や汗を垂らすだけだった。

本当なら奏に言つて、右腕の危険を取り除きたいが、当の本人が、1つのゴールである駅から視線を外さないで「私は大丈夫、私には兄さんがいる、私は……」と呪文のように呟き続けてやっと平静を保っている。もし、声をかけて、その平静を崩したときには、大惨事になることが予想できる。

だから、今の湊は日々鍛えている自分の右腕の耐久力を信じるしかなかった。

そんな状態が続くこと50メートル。

いよいよ、湊の右腕から、ミシミシミシミ、と鳴る音が大きくなってきた。

自身の右腕のあと僅かな寿命を感じた湊は冷や汗を垂らす。対して、奏は相変わらず呪文のように呟き続けて自身の平静を保っている。

そんな時。

100メートル先にいた『アレ』が何気なしに後ろを振り向いた。しかも、偶然なのか不幸なのか『アレ』は奏の視線上にいた。

次の瞬間、奏の身体を恐怖が支配した。

もちろん、奏を隣を歩く湊が100メートル先にいる『アレ』が後ろを振り向く姿など見えるわけがなかった。普通の人間ならまず見えない。

奏は『アレ』が後ろを振り向いたことを本能的に感じ取ったのだ。

そして、恐怖に身体を支配された奏が次の行動するのは簡単だった。

兄の胸に飛び込んで泣く。

「うっ、うっ……うっ……うっ……」

歩みを止めて、自分の胸で涙を流す奏の頭の上に手を乗せた湊は左右に手を動かして慰める。

今では泣いているが、それでもマシな方だ。1年前は失神までしていたのだから、充分に成長したと言える。

「今日もよく頑張った。駅に着くまでこのままでいいからな」

「はい……」

その言葉に安心したのか、奏は両腕を湊の身体に回してぎゅっと抱き締める。自身の体重も預けた。

抱きつかれた湊は奏のサラサラの長い髪を何度も撫でて安心させる。

これもいつもの日課。

だから、周囲の人間から、湊は周りから彼女を泣かせた彼氏、というレッテルを毎朝貼られている。

「いやー相変わらず恋人気分満喫の2人ですねー」

駅に着くと、2人の前に奏の同じくらい背で短い茶髪をした女の子が現れた。

「舞か」

「おはようございます、先輩」

三条舞は、さんじょうまい奏と同じ高校1年生で同じクラスメート。
ちなみに、湊は高校3年生、奏は高校1年生だ。

「あ……舞」

ここで兄の胸から顔を離れた奏が舞の存在に気付いた。

「奏、大丈夫？」

舞が心配そうに奏に聞いた。

「まだ胸がドキドキしてるけど、なんとか大丈夫です。兄さんのおかげでだいぶ落ち着きましたし」

「ふーん、その胸のドキドキは『アレ』のせいでのドキドキなのか、先輩に引っ付いてのドキドキなのか、どっちなんだろうね？」

「そ、それは……」

両手を前でもじもじしながら、ちらつと横目で湊の方を見る。

「うん？」

ちらつと視線を向けただけなのに、奏と湊の目があった。

「はう……っ」

瞬時に顔を真っ赤にする奏。

舞はそんな様子を見て、やれやれと手を広げて左右に首を振る。

「はいはい、ごちそうさま。奏がどれだけ自分の兄のことを好きなのかがよくわかるよ」

舞の言葉に奏がまた顔が赤くなる。

「さて、そろそろホームに行きましょう。もうすぐ電車が来るはずですよ」

舞を先頭に3人は改札口を抜けた。

これが桐宮兄妹のいつもの朝である。

第2話 朝の電車

朝の電車のホーム。

それは、桐宮奏にとって『地獄の入り口』とも言える場所だった。

「兄さん、乗らなきゃいけないですか？」

「大丈夫。俺がいるから心配するな」

「はい……………」

「誰かーこの甘い甘い兄妹を何とかしてくれー」

隣にいる舞が気怠そうに言った。

それもそのはず。

現在、桐宮兄妹は人目も気にせずにピタリと身体を寄せ合っている。正確に言えば、奏の方が湊の腕にくっついている。その姿は恋人同士としか言えない。

「それにしても、奏の『アレ』嫌いもどうにかありませんかね……………」

…私が入る隙がどこにもない……………」

最後の方は小声になる舞。

「そうだな。まあ、これでも1年前と比べたらマシになった方だ。無理に急いで解決するようなこともない。時間が解決してくれるのを待つしかないだろ」

「先輩も大変ですね——奏の男性恐怖症は」

そう。

奏は現在進行形で男性恐怖症だ。それもかなりの深刻な。

『アレ』男性』が、目線を向けるだけで本能的に背筋に寒気が走り、少し触れるだけで首筋に毛虫がいたように動揺する。

これが発症したのは1年前だが奏が言った通りこれでもマシになっている。1年前は男性の視線を10秒間向けられるだけでも失神にまで至っていたほどだ。

そんな中、奏の支えになったのが兄の湊だった。世界で唯一奏に普通に接することのできる男性である。

なぜ、奏が男である湊に男性恐怖症が発症しないで、他の男には発症するのは、また別の話。

『もうすぐ1番線に伏獅成行きがします。下がってお待ち下さい』

電車到着のアナウンスが流れた。

アナウンスに合わせて、黄色い線まで下がる人たち。

ものの数分で電車が線路と車輪を擦れさせた音ともに来た。湊と奏と舞は黄色い線のすぐ内側にいた。

その時、小さな振動が湊たちに伝わった。

地震である。

日本人の湊たちは地震が来たことに警戒した素振りも見せなかった。こんなことは日常茶飯事で慣れていたからだった。

しかし、その地震は徐々に大きくなっていった。

結果、人が立っていらなくなるほどの地震が湊たちを襲った。

大きな地震に駅の所々から悲鳴が上がる。天井から吊り下げられている駅名が書かれた看板が左右に揺れる。

もうすぐホームに入りかけていた電車は地震のせいで運転手がブレーキをかけるタイミングを失っていた。必然的にそのままのスピードでホームに飛び込むことになった。

「きゃっ！」

地震でバランスを失った奏が倒れた——線路の方向に。
ゆっくり奏の身体が倒れていく。

「奏！」

湊が倒れる奏に手を伸ばすが、あと少しというところで手が届かない。

「兄さん！」

倒れる奏が必死に手を伸ばす湊に向かって手を伸ばした。その小さな手を湊の手が捕まえた。2人の身体は線路の上に飛び出していた。

しかし、時は既に遅し。

その2人に向かって、ブレーキをかけていない電車が迫っていた。

キキキキイイイツ！！と電車の前に飛び出した2人の姿を見た
運転手が慌ててブレーキをかけるが、電車は止まることなく2人に
向かって突っ込んでいった。

「先輩！奏！」

舞の悲痛の叫びがホームに響き渡った。

第3話 森の小屋

「ここは……………」

湊が目を覚まして、起き上がった。

しかし『目が覚めたら病院のベッドの上でした』という展開ではなかった。

目が覚めた場所は、地面の上だった。辺りを見回してもあの駅はなく、見慣れた建物もない。

しかも、地面はコンクリートとかではなく柔らかい土。

頭がぼおつとしている湊の目にまず入ったのは、葉が生い茂ったたくさんの木々だった。森のような背の高い木が湊を見下ろしている。上からはいくつも重なった葉のカーテンの隙間から太陽の光が差し込んでいた。

「奏は！——よかった」

そんな幻想的な光景に目を奪われていた湊はすぐに奏のことを思い出して、辺りを見回そうと意識を外に向けると、自分の手を握っている奏に気付き、ホッと息を付いた。電車で跳ねられたような傷もなく、息もちゃんとしていた。

奏の制服や綺麗な髪が土で汚れるわけにはいけないので、湊は静かに握っている手を外して、地面に倒れている奏の身体をそっと起こして、そこらへんにある大木を背もたれにして座らせた。

「さてと……………」

奏の隣に腰を下ろしてた湊は思考を切り替えて、冷静に今の状況を整理し始めた。

湊の頭の中では、駅で電車が来るときに地震が起きて、奏の身体が線路に倒れたになったのを自分が手を伸ばして奏の手を掴んだときに、電車のブレーキ音が聞こえてきた、ところまでは覚えていた。

（死んだんじゃないのか……………？）

湊は回想から死を考えたが、いやいやと首を振る。

（今こうして俺と奏は生きているし、身体に電車に跳ねられたような痛みや怪我はないから、それはないと思う。まあ、ここが死後の世界だという可能性はないが）

ふと、携帯はどうだろうか、と思い、制服のポケットから携帯を出して、画面に表示されているアンテナをしてみるが、アンテナは1本も立っていないかった。

ここは圏外か、と嘆息する。

さて、本当にここはどこだろうか？と思考は振り出しに戻る。
次に思い立ったのが、

（まさか、異世界トリップ……………？）

オンライン小説では定番のキーワードになる単語だ。湊もそういう小説はいくつか読んだことがあった。

これならいくら説明がつく。根拠や理論など全く無視した結論だが、これなら納得できると湊はでうんうんと頷く。

「ん、んう…………あれ？兄さん？」

「目が覚めたのか、奏」

目が覚めた奏は身体を起こすと、辺りを見回して目をパチクリさせた。

どうやら、目の前に広がる森を理解できないらしい。

「に、兄さん……………ここは、どこですか？」

「わからない。俺もさっき気付いて、この状況だ」

「でも、さっきまで私たち、駅で……………あっ！兄さん！大丈夫ですか！怪我とかないですか！」

奏が急に声を上げて湊に聞いてきた。

「急にどうしたんだ？」

「どうしたんだ？じゃありません！兄さんは私を助けようとして、電車に跳ねられそうになったんですよ！心配するに決まっているじゃないですか！」

「少し落ち着け、奏。俺に怪我とかないし、それに奏自身もそういう怪我もないだろ」

「あ……………そう言われればありませんね。どうしてでしょうか？」

湊の言葉で落ち着いた奏が首を傾げる。

「怪我よりも、ここがどこかだ。どうやら、俺たちはとんでもない状況下にいるらしい」

「とんでもない状況？」

また首を傾げる奏に、湊は異世界トリップのことについて話す。

奏はオンライン小説は読まないため、異世界トリップがどういいうものかを説明する。

案の定、奏の反応は、

「いくら兄さんでも、そんな話信じられません。もし、それが本当なら元の世界に帰れないじゃありませんか」

「俺だって信じたくはない。だけど、ここが死後の世界だ、と考えるよりは、ここが異世界と考えて、俺たちは生きていると思った方がいいだろ。生きていたら、元の世界に帰れる可能性があるかもしれない」

この状況をポジティブに考えようとする湊に、うんうん、と奏が笑顔で頷く。

心の中では、さすが兄さんです、と思っているのかもしれない。

このまま座っていても、埒があかないということになり、湊と奏は森の中を歩くことにした。

携帯は電池節約のために、2人とも電源は切った。もしかしたら、もう電源を入れないかもしれない、と思いながら。

「兄さん、重くないですか？」

「重くないし、このくらい平気さ。なんなら、奏をおんぶしてあげよっか？」

「し、しなくいいです！それに、この歳でおんぶは恥ずかしいです！」

「冗談だよ」

何が重い重くないかといのは、湊が持つてる2つの学生鞆のこと。1つは湊の学生鞆でもう1つは奏の学生鞆だ。なぜ、湊が奏の学生鞆を持っているかというと、ただ単に自分の妹を気遣っているだけの話である。

さらに、知らない場所で何が起るかわからないということで、湊が先頭を歩き、その後ろを奏が歩いていった。

「それにしても、綺麗なところですね。こんな綺麗な場所私は初めて見ました」

そう言いながら、奏が上を見上げる。

「日本にもこんな綺麗な場所はないかもな。空気は澄んでいて、マインスイオンも満ちている気がする」

森の景色について話していたら、少し開けた場所に出た。その場所の中心には、ポツンと小さな小屋が建っていた。壁は木の

丸太が積み重なってつくられており、屋根の煙突からは白い煙が出ていた。家の横には畑があり、何かの作物の葉が土から飛び出していた。

紛れもなく、人が住んでいる証拠だ。

湊と奏はようやく見つけた人工物に一目散に駆け出した。木製のドアには呼び鈴はなく、手でノックすることになった。

2人はこの家主にあった事を全て話すつもりでいた。信頼できる人ならいいが。

もし、ここが異世界ならこの世界についてのイロハを教えてもらい、元の世界に帰る方法を探しながら暮らしていく。考えたくないが、ここが死後の世界なら、その現実を受け止める覚悟だ。

「誰かいませんかー！」

湊が手の甲でトントンとノックする。その後ろには奏が湊の服の裾を掴んでいる。

約30秒後に、ガチャとドアがゆっくり開けられた。ドアが開けられたことにまずは安心する2人。

そして、出迎えてくれたのは――。

湊の顔目掛けて突き出された棒だった。

湊は条件反射で首を横に傾けて突き出された棒を避け、棒を突き出した犯人の手首を掴み、もう一方の手で真っ直ぐ腕の関節も掴み犯人の身体をこちらに引き寄せると同時に、棒を持った腕を犯人の背

中で捻り上げるようにする。捻り上げられた腕の痛みから手から棒が地面に落ちる。

ここまでで、棒を突き出されてから約1秒。

「に、兄さん!？」

急に自分の兄が攻撃をされたのに驚いたのか声を上げる。

湊は奏の声に応えず、真っ直ぐ犯人に視線を向ける。

「痛だだだっ！こら、止めんか、馬鹿者！」

そこで初めて、湊は犯人の容姿に気付いた。

犯人の身長が湊より遥かに低く、奏よりも小さい。

そして、捻り上げた腕は細く、もう少し湊が力を入れれば折れてしまっただった。

「止めんかと言っておるのが聞こえないのか！もう少し年寄りを労ら……むっ」

途中で犯人の台詞が止まる。少しやり過ぎたか、と思った湊は捻り上げた腕を解放することにした。

解放された犯人がこちらに顔を向ける。顔を見たら婆さんだった。

「なぜ、襲った？」

湊が警戒を解いた婆さんに聞く。

「この辺りは、人がいないからのう。人が訪ねてくることなどないのじゃ。だから、流れの賊かと思って先制攻撃を仕掛けただけの話じゃ。どうやら勘違いのようじゃの。すまなかった」

一応、理屈は通っている。

湊たちがここまで来るのに、人っ子一人見ていない。この辺りに住んでいるのは、この婆さんだけだろう。

婆さんはそれだけ言うと、家の中に入っていった。急に会話を切られた上に、ドアの外に放置された湊たちは、え？どうすればいいの、と互いに顔を見合わせる。

「ほら、何をしておる。さっさと家に入らんか。初めてのこの家の訪問客じゃ。茶くらいは出すぞ」

婆さんが湊たちを家の中に促した。

第4話 超能力の世界

湊たちが入った小屋の中は、所狭しと物が溢れていた。1番奥の壁を除く、三面の壁には天井まである棚がある。箱やよく分からない形をした像などが棚に並べられている。奥の壁にはキッチンがあった。天井からはランプが吊り下げられている。

そして、部屋の真ん中にはテーブルがあり、椅子が4つ置かれていた。

「今、茶を入れるから、座って待っていてくれ」

婆さんはそう言うと、食器棚からコップや茶の元になるであろう物が入った袋を取り出してキッチンで茶を入れ始めた。

席を勧められた湊と奏は大人しく木の椅子に座って、婆さんの入れる茶を待った。

2分程で、婆さんがお盆に茶の入った取っ手付きコップを3つ乗せてテーブルにやってきた。コップを1つずつ湊たちの前に出し、最後に自分の前に置いた。

婆さんはコップが置かれた席に座ると、持っていたお盆を隣に置く。

婆さんは湊と奏を見ると口を開いた。

「手荒な歓迎じゃったが、その茶で勘弁しておくれ。さて、お主らは何用でここを訪ねた？」

前半はおどけた口調だったが、後半は真剣味が増した口調になる婆さん。

「俺の名前は、桐宮湊、と言います」

「妹の、桐宮奏、です」

「ワシは、マーズ・ウェリントン、と言う」

自己紹介が終わったところで、湊たちは婆さんに自分たちが異世界から来たことを話した。もちろん、この話だけで信じてもらえるわけがない、とは思って次の言葉を言いかけたときに、

「よし、わかった。お主らの話を信じよう」

まさかの返事だった。

これには、湊と奏も目を丸くした。

「こんな突拍子もない話を信じてもいいんですか？」

とんとん拍子に進んでいることに違和感を感じざるをおえない湊は思わず聞いてしまう。

「こう見えても、人の嘘を見抜くことは得意で。お主らの話は本当のことだと思ったんじゃないよ」

マーズはやっぱりと微笑みながら言った。

「兄さん、信じてもらえてよかったですね」

「それはいいけど、どうにも簡単過ぎってどうか……………」

隣の奏が湊に笑顔で言う。反対に湊は物事の進む展開に違和感を感じ

じていた。

「まあ、ミナトが警戒するのも仕方ないと思う。ワシとて100%信じているわけではない」

「じゃあ、何で信じてくれたんだ？」

「眼じゃよ」

「眼？」

「異世界から来たと話をするミナトたちの眼は嘘を言っていると思えなかった。こう見えても、ワシは人の嘘を見抜くのは上手いからのう」

「……………」

「警戒してくれるのう。まあ、いいじゃろ。この世界について説明する。耳をかつぽじって聞くのじゃ」

マーズがこの異世界についての説明を始めた。

この世界には、南の大陸と北の大陸に分かれ、その間には広大な海が広がっている。北の大陸と南の大陸を繋ぐ陸路をなく、海路のみが存在するという。

北と南の大陸には、それぞれ国というものがある。

まずは、南の大陸。

南の大陸には、火の国・水の国・雷の国・土の国・風の国という五大国と中立国サンテリアで成り立っている。

場所は、中立国サンテリアが大陸の真ん中を位置し、その周りを囲むように五大国がある。それぞれ、中立国サンテリアを除いた南の大陸の土地を均等に領土としている。

五大国はそれぞれ、火の一族・水の一族・雷の一族・土の一族・風の一族が統治し、中立国サンテリアは、南の大陸の唯一の教育機関であるサンテリア学園の校長が統治している。

次に北の大陸。

北の大陸には、光の国・闇の国がある。

地図上では、北の大陸の左半分が光の国、右半分为闇の国が領土として持っている。

光の国は光の王を筆頭とした光の一族が、闇の国は闇の帝を筆頭とした闇の一族が、それぞれ治めている。

また、光の国と闇の国の領土の境界線があやふやで戦争の真つ最中。この戦争には南の大陸の国々は干渉しないことを決めている。

ちなみに、北の大陸と南の大陸の間にある海には幾多の島があり、そこにも人が住んでいる。

そして、ここが1番大事な話。

この世界では『超能力』というものがある。生まれたときに超能力が必ず備わる。南の大陸では、唯一教育機関であるサンテリア学園で自分で制御し使いこなすことを学ぶ。

超能力には種類ある。

上げることができる。もちろん、レベルが高い程いい仕事に就ける。唯一例外として、レベル10には特別条件で“自動能力を身にオートスキルつける、もしくは、自身の超能力と一体となる”というのがあり、才能や自身の能力も関係してくるため、レベル10に上げられる者はごく僅か。

現在のレベル10は、五大国の頭首と北の大陸の光の王と闇の帝だけと言われている。

「この世界については、このくらいかのう」

「とんでもない世界だな……………」

「超能力ですか……………」

マーズの説明に湊たちは啞然とする。

自分たちの世界との違い。漫画や小説の中でしか、お目にかかれなかった超能力という非科学的な力。

それらの存在は、ここが異世界だ、ということを変更して湊と奏に実感させた。

「お主らの世界とは違うのか？」

「根本的に違う。超能力っていう言葉はあるけど、超能力を身に付けている人なんていなかった」

「超能力者がいない世界か。それこそ、信じられない話じゃの」

言葉では納得していないと言っているが、マーズの顔は納得しているような表情をしていた。

「マーズさんは、何の超能力を持っているんですか？」

今度は、奏がマーズに聞いた。

この世界が、超能力で溢れているのなら、目の前にいるマーズにも超能力があるということになる。

「それはのう……………秘密じゃ。」

「秘密……………ですか」

「ふむ……………これは、1つ教えといてやらんといかんのう。超能力というのは、言わば個人情報のようなものじゃ。超能力を使役することで生活をしている人間がたくさんいる。理由は大きくお主らの世界と変わらない。家族を養うため、自分の夢を叶えるため、などと理由は様々じゃ。お主らが考えるような、お遊び程度のための力ではない。だから、カナデの質問には答えられないのじゃ。カナデの聞いていることは、お主らで言うならば、他人の住所を聞いていると同じと言ってもいいくらいじゃな」

奏と奏は、超能力を見誤っていた。

超能力がない世界で生活してきた2人は漫画や小説でしか見られない超能力を憧れなどの感情で軽く見ていた。

「とは言っても、この世界の人間の全部が超能力で生活しているわけではない。例外もいるということじゃ」

「す、すみません！そういうことは露知らず！」

マーズに諭された奏は自分のしたことに頭を下げた謝った。

「別によい。知らなかったのじゃからな。これから気を付けていけばよい。まあ、ワシの場合はちよいと特殊じゃから教えられんけどな」

「特殊？」

「そんなに気にせんでよい。時期が来たら話す。それに、お主からしたら、ワシの超能力を当てるのも1つの余興じゃろ？」

ニヤリと笑いながら言うマーズ。

その表情はイタズラをする子供に見えなくもない。

「それは秘密じゃないですか？さっき言ったように、個人情報だつて……」

「今の一般論。ワシから見たら、超能力はその人の“顔”じゃ。仕事をするにも、超能力を使えば誰かしらに知られる。住所も同じじゃ。バレたらそれまでじゃよ。それに、住所と同じように幾千幾万もある超能力から1つを選び出すなど無理だとは思わんか？」

マーズが2人に問う。

「無理だな。何も手掛かりなしに、婆さんの超能力を当てるなんてでも、婆さんの特別つてのはいいのか？」

湊がマーズに聞く。

「別によい。さっきも言った通り、バレたらそれまでじゃ」

マーズはそこで言葉を切ると、さっきまでイタズラをする子供のよ
うな表情だった顔が、一気に真剣な表情になった。

「今のお主らがこの世界で生きていくためには、2つばかり根本的
な問題がある」

「それは、この世界の常識とかじゃないのか？」

「違う。この世界についての常識や知識はワシが教えられること
じゃ」

湊に続いて、今度は奏が質問する。

「では、お金とかですか？私たちはこの世界に来たばかりなので、
この世界のお金なんて持っていないせんし」

「それも違う。金についてはワシの金から出そうかと思っている」

「そ、それは悪いですよ！こうやって、私たちのことを受け入れて
もらっているだけで、恩を感じているのに」

「たいしたことはない。どうせ、使わぬ金じゃ。いくら減ろうが構
わないからのう。もし、金がもらうのが嫌なら、貸しってことでもい
いぞ」

「ありがとうございます！絶対にお返しします！頑張りましょうね、

兄さん！」

「お、おう」

マーズと奏のやり取りを見ていた湊も奏と一緒に意見だった。

「さて、話がズレてしまったのう。お主らが話に水を差すからじゃぞ」

この言葉には、湊と奏も苦笑で返した。

「1つ目の問題が、お主らの超能力の有無じゃ。説明したように、この世界は超能力で溢れいて、超能力がない人間などいないのじゃ。ところが、今のお主らには超能力がない。世間に、超能力がないなど知れると厄介事になること間違いなしじゃ」

「それは、大問題だな……………」

「とてもマズいですね……………」

マーズの挙げた問題に、湊と奏は苦悶の表情をする。

「2つ目の問題は、お主らの髪と目じゃ」

第5話 半年後

結局、湊と奏はマーズの家に住むことになった。簡単に言えば、居候である。

マーズは基本的に自給自足で生活している。家の隣にある畑で野菜をつくったりして、それを食べている。たまに、森に手製の罠を仕掛けて動物を捕まえて、肉を確保することもある。調味料などは森を抜けたところにある町で調達する。水は近くの川からバケツで汲み出して、家にある水溜めの容器に入れている。これは1日に何往復もする重労働。

1人だけでも大変な自給自足生活に、成長真つ盛りな2人の高校生が参加してくるのである。それぞれ役割分担をして、マーズの手伝いをするようになる。最初の頃は色々と問題が発生したが、半年も経てば問題も解消されていった。

マーズの家の構造は1階の1部屋と屋根裏だけだ。1階はキッチンなどがある普段の生活で過ごす場所で、屋根裏は睡眠を取るためのスペースとなっている。布団の数はが普段使用しているのが1枚と予備で1枚の合計2枚。必然的に桐宮兄妹は予備の方を使うことになる。

このことに、奏は一緒に布団に寝ることに満面の笑みを浮かべ、反対に湊は苦笑いだったという。

異世界に来て半年後。

「はッ！」

「ッ！」

マーズの家の前に湊と奏はいた。

毎朝恒例となつているランニングを終え、元の世界では休みの日しかできない“組み手”をやっていた。

桐宮流武闘術。

特別な流派でもないが、桐宮家の祖先から伝わっている流派だ。戦闘向きの流派で、祖父が師を務める道場で鍛練する湊と奏は、はっきり言つて強い。

湊は幼少の頃からやつていて、例え不良十数人に囲まれたとしても、素手で余裕で勝てるほどに強い。

奏は女の子ということもあって、護身用程度に基礎を固めて鍛練を止めてしまっていた。しかし『1年前の事件』から奏は再び鍛練を始めている。今では不良数人なら倒せるほどに強くなっている。

ところが、異世界に来てしまひ質不足な鍛練になりがちになっている。場所は道場でもないし、2人の師である祖父もいない。だからできるだけ腕が落ちないように気をつけて、毎日欠かさず鍛練をしている。休みの日しかできなかった組み手は毎日やるようにしていた。

ちなみに、異世界に来た初日に湊がマーズの突き出した棒を避けて反撃できたのは、これが理由だったりする。

「お、やつておるのう」

湊たちが互いに攻撃を繰り返しながら防御する組み手をやっている

最中に、屋根裏から降りて来たマーズ。組み手をしている湊はマーズの方にちらりと見る。一方の奏はマーズが来たことに気付いていない。それだけ、組み手に集中していると言える。

そして、激しい攻防の末、湊の拳が奏の胸の前で止められる。拳を止めたのは、奏ではなく湊本人だった。所謂、寸止めというやつだ。

「とりあえずは、これくらいか」

「はあ、はあ……… すいません、また兄さんの手を止められなくて」

湊の言葉に奏が肩を上下させながら答えた。奏が息切れているのは仕方ない。湊は幼少の頃から鍛練を続けているため、湊と奏では力量が違ってきてしまう。そのため、組み手をするときは湊が手加減をしながら奏をやることになる。さらに、湊が幼少から鍛練を続けているため、体力が奏より遥か上というのも理由になる。

「謝らなくていいって。むしろ、よくついて来た方だと思うぞ。前に比べたら、長く出来るようになってるから、奏の腕が上達している証拠だ」

「ありがとうございます。でも、まだまだです。兄さんには遠く不及びませんし、何よりこれは兄さんの鍛練になっていませんし」

これほど奏が息切れしている鍛練でも、湊にとっては準備運動に過ぎない。

「俺と奏では、鍛練に費やしている時間も熟練度は違うわけだからな。それは仕方ない」

「なら、私は兄さんを目標に鍛練するのみです」

奏が腰を低くして構えた。

「ほどほどにな。妹に抜かれた日には、兄としてのプライドがズタボロになっちまう」

奏の言葉に苦笑いしながら返すと、湊も奏と同じように構える。

これから湊たちがやろうとするのは、超能力を使った鍛練。

そう。2人は超能力者だ。何の因果かは分からないが、異世界に来て1週間で超能力が発現したのである。それから半年の間、超能力の制御や応用に時間を費やした。最初の頃は四苦八苦しながらだったが、今では完全に超能力を制御下に置いている。

「いつも通りにやるから、ちゃんと受け止めるよ」

「はい」

奏の返事した直後に湊の姿が掻き消えた。突如、奏の周りの砂塵が吹き荒れ始める。やがて、奏を中心に小さな竜巻とも呼べる代物ができる。その中心にいる奏は構え始めてからピクリとも動かずに、この竜巻をつくる兄からのサインを“肌で感じる”べく全身の神経を研ぎ澄ましていた。

「……ッ！」

姿が視認できないほどの速さで自分の周囲を走り回る湊からのサインを感じ取った奏は身体の向きをサインが発せられた方向に変える。同時に両手で前に突き出して衝撃を受け止めるような態勢を取る。

その一瞬後に両手に衝撃が来るのを感じた。彼女が超能力を使っていなければとても耐えられない衝撃を顔色一つ変えず受け止める。その直後に、またサインが別方向から発せられる。それに応じて奏も身体の向きを変える。

そんなやり取りが5分間ぶつ通しで続けられた。最後は体力が無くなった奏がサインを感じるも、直後に襲いかかる衝撃に身体の向きを変える動作が間に合わず両手ではなく身体で受け止める形で終わった。超能力を使っているため、衝撃で吹っ飛ぶことはない。

「はあ……はあ……はあ………」

今ので息も絶え絶えになった奏はその場で座り込んでしまう。そして、いつの間にか消え去っていた竜巻の代わりに、先程姿が消えた湊が姿を現していた。座り込んでしまった奏を心配するように、湊も腰を下ろして奏の状態を伺う。

「大丈夫か？この後始末は俺がやっとくから、川に行って汗を洗い流してきた方がいい」

湊たちの周りの地面は踏み込みなどで抉れてしまい、凹凸が激しくなっている。鍛練した後は毎回こんな惨状になり、前々からマーズから元に戻すように言われている。

「はあ……はあ……はあ………はい、分かりました」

了解した奏は立ち上がろうとするが、足がガクガクの状態で立つことすらままならない。それを見湊が奏の手を引っ張り、フワリとその身体を空中に浮き上がらせて自由落下で落ちてくる奏を両手で柔らかに受け止めた。湊にお姫様抱っこをされた奏は鍛練で火照った顔を別の意味で真っ赤にさせる。

「な、ななな……っ！」

「その足で滝まで歩くのは大変だろ。川まで送ってやるよ。婆さん、ちよつと行ってくる」

前半は奏に向けた言葉で、後半は端^{はた}から鍛練を見ていたマーズに向けた言葉だ。

「了解した。早く帰って来るんじゃぞ。いつまでも地面をこのままにされるのは迷惑じゃからのう」

「分かった」

湊はマーズに了解を得ると、自分の能力を使って地面を蹴った。一瞬のうちにしてマーズの前から姿が消えるが、

「もつと地面を抉ってどうする。困るのはお前じゃぞ」

湊たちが去った跡に鍛練のときより大きく抉れている。それを見たマーズが誰の耳に届くわけもなく呟いた。

奏をお姫様抱っこしている湊は近くの川に向かっていた。その川は腰くらいまでの水深しかなく流れは緩やか。大雨などで川の水の量が増えない限り、人が流されることはない。

毎日の鍛練で汗をかく湊と奏はこの川で身体をを洗い流していた。

理由は、マーズの家に水道もガスも電気も通っていないからだ。調理は火を起こしてやる。

そんなことはさておき。

今の奏は酷く焦っている。大好きな兄にお姫様抱っこをしてもらいながら森の中を颯爽と駆け抜ける。奏にとっては夢心地のような状況だ。

自分が汗くさくしなければの話だが。

鍛錬をした後は必ず汗をかいてしまったため、奏はいち早く汗を流すようにしている。湊に嗅がせないためだ。しかし、今日は足が歩けないほどまで疲労が激しいために、湊に運んでもらっているわけだ。もちろん、奏が汗くさくても湊が性格上何も言わなし、嫌な顔をしていないのは知っている。

それでも、汗くさい姿を知られたくない、というのは乙女心というやつだった。

と、奏はここまで考えてみるが、現状は何も変わらない。ここで意地を張って「降ろして」と言っても、湊が聞き入れるはずがないし、自分が望んでないのは分かっていた。

結論、何も考えずこのまま夢心地の気分になろう、ということになった。

「どうした、奏？急に顔がニヤけて」

「な、何でもありません！」

思考することを止めたために、感情が顔に出たのだろう。顔がさらに赤くなるのが分かる。

そして、夢心地に浸ること数分。

川に着いた湊は川岸まで行き、足だけが川に浸かる形で奏の身体を降ろした。

この時の奏は名残惜しそうな顔をしていた。

「それじゃ、俺は片付けをしてくるから」

「はい、兄さん、ありがとうございます」

奏は素直に礼を言った。

湊はそれを聞くと、来た道を跳んで戻って行った。

「さてと……………」

奏は川に浸かっている足から水の冷たさを感じながら、汗が染み込んでいる服や下着もその場で脱ぎ始める。

服はマーズが町で買ってきてくれたものだ。世界が違えど服というのは同じものだった。異世界初日に着ていた制服は綺麗に風呂敷包みされて屋根裏に置かれている。

服と下着を脱ぎ終わり、奏は裸体の姿になる。その姿は可憐で美しいと言える。白い肌は後ろを流れる長い黒髪でいつそう引き立てられ、出るところは出ている。

つまるところ、美少女だ。

ただ、奏はこの身体を恨めしくも思っている。この身体のせいで大嫌いな『アレ』がいやらしい目で見えてくるからである。その度に、背筋に悪寒を走らせる。いつそのこと性転換の手術をすれば、いやらしい目も無くなるのでは、と考えていたこともあった。その考えは一瞬で打ち消されたが。自分が『アレ』と一緒にするのは嫌だっ

た。そして何より、大好きな兄が自分を『女』として見てくれなくなるから。性転換して『その道』に走らせる手段もあるが、それはそれで嫌だった。

「ふう……………」

川の真ん中まで足を進めた奏はパシャバシャと手で水を掬いながら身体にかけて汗を流す。いきなり、冷たい水の中に入ると風邪を引いてしまう。

今では習慣になっているが、最初の頃は大自然の中で裸になるのに抵抗があった。誰も見ていないとは言え、羞恥心が半端なくあった。しかし、その羞恥心を捨てないと身体の汚れも落とせないので、自分の中で割り切ることにしている。

だいたい汗が流れ落ちたところで奏は川から上がることにした。川岸に奏の濡れた髪から水の雫が滴り落ちる。

上半身を川岸に上がらせたところで、ある重大なことに気付いた。

「着替えがない……………」

奏は絶望しきった声でそう呟いた。

第6話 川岸

奏にとって痛恨のミスだった。

今まで着替えを忘れることはなかった。やはり、あの夢心地のせいで色々と思考が止まってしまっていたらしい。

「うーん……………」

目の前には、今まで着ていた汗くさい服。これをまた着て、家に戻って着替えを取ってくるのは気が引けるに加え、水浴びした意味がない。

だからと言って、このまま手を拱こまねていては状況は何も変わらない。

奏は決意した。

川から上がり、脱いだ服を手取る。

「奏、着替え持ってきた」

「うきやあぁっ!？」

突然の声に反射的に手に持っていた服を捨てて、川の中に飛び込むと同時に声がした方向へ超能力による『莫大な力』を放出する。意識せずに身体が勝手にしたことだった。

声をかけた本人の湊は自分に向かってくる『莫大な力』に動じもせず右手を前に出し同様の力で『莫大な力』を相殺させた。そして、2つの力が衝突した場所を中心に衝撃が波のように広がり、木々の枝や葉を揺らした。川で流れる水も飛び散らせる。

湊は後ろの木の影にまた隠れる。声をかけた場所はここからであつて、さつき相殺させた所ではない。奏が力を放出させたのを“木の影から気付いて”辺りに被害が及ばないように前に出ただけのこと。また木の影に隠れたのは、奏を怖がらせるからである。湊に対して悪寒も何も起きない奏だが“今の状態の奏”は例え湊でも恐怖の対象となる。奏が無意識に力を放つたのも恐怖を排除しようとする自然なことだった。

ちなみに、奏が放出した力は大木を一瞬で吹き飛ばすほどの威力を誇っていた。

「奏、大丈夫か？」

木の影にいる湊は川の中にいる奏へ声をかける。

「だ、大丈夫です。いきなり声をかけないで下さい。ビックリしたんですから」

「こうでもしないと、お前の男性恐怖症は治らないだろ」

無茶な考えである。

女が裸の状態であるところへ男の声が聞こえてきたら、誰だって驚くだろう。

「だからって、いきなり声をかけないで下さい。つい、能力を使つてしまったじゃないですか」

「だったら、どうすればよかったんだ？声をかけないと、こつちに気付いてもらえないだろ。まさか、いきなり目の前に現れるか？」

「……………私を泣かす気ですか？」

「まさか。俺は奏に泣いて欲しくないよ」

「泣かす一步手前のことをやっというて、何を言っているんですか」

ちよつと不機嫌な奏。

当たり前のことだ。自分が水浴びしているところへ、いきなり声をかけてきたのだから。

本当に泣く一步手前だったのだ。

「それはすまないな。なら、どうすればよかった？」

「サインを送って下さい」

鍛練のときにも使っていた不可視で肌で感じるサイン。奏はこれなら大丈夫かもしれない、と思った。

「サインか。それなら、大丈夫なのか？」

「たぶん、大丈夫だと思います。ところで、兄さん……………」

「何だ？」

「着替えもらえませんか？少し寒くなってきましたので」

「そうだったな」

奏に着替えを渡すべく湊は木の影から出てきた。改めて湊の姿を見た奏は驚いた。

「まさか“その状態”でここまで来たんですか？」

「まあな。婆さんに着替えを持っていくときに、女の下着は見るもんじゃない、って言われて、この布で目隠しされた」

湊は言いながら、自分の目を隠している布を指差した。布は湊の両目を覆い隠して頭の後ろで結ばれていた。これでは、湊の視界が完全に機能していない。

「大丈夫だったんですか？」

ここまで来る間には太さや大きさが違うたくさん木々がある。さらに、道は舗装などされていないので、凹凸が激しい。目隠しの状態では、いつ転んでもおかしくない道だ。

「心配ないよ。能力の練習になったから、ちょうどいいくらいさ」

しかし、そんな道は湊の超能力にかかれただの道。

「ちなみに、今の奏の場所も分かってるぞ。川の場合、周りの木的位置までな」

今の湊は超能力の応用で自分の周りを把握できる。サインも同じ応用だ。

「ここに置いておくけど、いいか？」

「あ、はい。そこに置いといて下さい」

奏の近くまで来た湊は川岸の近くに服を置いた。木の影からここま

で来る歩く姿は、目隠しされているにも関わらず、フラフラなどせずに真っ直ぐ歩いてきた。まるで、目隠しを最初からしていないように。

奏は川から上がった。目隠ししている兄の目の前に裸の妹がいる、という実に犯罪一歩手前のような状況になる。奏はそれを認識すると、顔を紅潮させながら手早く着替え始めた。もちろん、兄の目の前で。

第7話 編入決定

奏が着替え終わった後、湊たちは川から離れてマーズの家に向かっていた。奏のご要望でお姫様抱っこで森の中を突き進む。

今の湊は目隠しをしていない。奏の指摘で、目隠し状態では危険なので布は取ってある。というのは、建前で本当はお姫様抱っこされている奏が湊の顔をちゃんと見上げたいという本音が隠されていた。もちろん、当の湊は知る由もない。

「お主らには、サンテリア学園に編入してもらおう」

川から帰ってきた湊たちは家に着くなり、マーズに、大事な話があると呼ばれて席に着いたところで開口一番に言われた。

「随分、急な話だな」

「編入ですか……？」

湊と奏がそれぞれ感想を述べる。

「そう思うのも無理はないか。つい昨日、編入の許可が下りたからの」

最近、マーズが町に出て行く回数が多くなったような気がしていた。おそらく、そのときに編入の手続きを進めていたのだろう。

だが、それよりも気になることがある。

「なぜ、俺たちが学園に編入しなくちゃならない。学園という公共の場所に出たら“この髪と目の色”のせいで大騒ぎは間違いないぞ」

「ミナトがそう思うのも無理はない。じゃが、お主らはいずれ元の世界に帰る手段を見つけるために、この世界を旅するのじゃろ？」

「そのつもりだ」

湊は即答した。

これは奏と考えて出した決断だ。

マーズの話の内容は、この世界を旅するなら、街に入るにしても宿を取るにしても身分証明書がいる。提示を求められて、提示ができなかったら罪人扱いになってしまう。それでは、街にも入れない、宿も取れない、そんな不自由な旅になってしまう。

それで、この身分証明書を手に入れる1番簡単な方法がサンテリア学園の卒業をすること。卒業すれば、卒業証書がもらえる。この卒業証書は、南の大陸だけなら万国共通で身分証明書代わりになる。要するに、サンテリア学園の卒業証書は身分証明書代わりになるから編入して取ってこい、ということだ。仕事に就いて身分証明書を発行することも可能だが、この大陸で仕事に就くには、法律でサンテリア学園の卒業が必須条件だ。どちらにしろ、サンテリア学園に卒業するしかない。

「学費とかはどうするんですか？」

「心配ない。サンテリア学園はこの大陸唯一の教育機関じゃから、

五大国と中立国から多額の援助金を受けて成り立っている。入学費、授業料などその他諸々は全て無償じゃ」

五大国と中立国のバックアップがあるサンテリア学園は、大陸中から集まる未来の子供たちに最新の学校環境と授業をする。未来を担う子供たちを思っていることだ。

「さて、これが1番大事な話じゃ。お主らの髪と目の色のことじゃ」

日本人である湊たちの黒髪黒目だ。

この黒色が問題なのだ。

この世界にいる、自然型の超能力を司る火・水・雷・土・風・光・闇の一族の人間はそれぞれ髪と目の色が違う。^{つかさど}

火の一族は、赤髪赤目。

水の一族は、青髪青目。

雷の一族は、金髪金目。

土の一族は、茶髪茶目。

風の一族は、緑髪緑目。

光の一族は、白髪白目。

闇の一族は、黒髪黒目。

では、一般人はどうなのかと言うと、ただ単に髪と目の色が違うだけ。緑髪赤目や金髪青目などのバリエーションがたくさんある。

さて、湊たちは黒髪黒目である。この色は闇の一族と同じ色だ。この世界での黒髪黒目は闇の一族の証拠であり、湊たちも闇の一族の人間ということになってしまう。もちろん、湊たちはこの世界とは別の世界の人間であり、闇の一族の人間ではない。しかし、事情を知っているマーズ以外の人間が湊たちを見たら、迷うことなく闇の一族の人間だと判断するだろう。さらに悪いことに、ここは南の大

陸。闇の一族がいるのは北の大陸だ。戦争真っ最中の闇の国を統べる闇の一族の人間が、なぜ南の大陸にいる、となってしまう。下手したらスパイ容疑のような重い罪状が問われてしまう可能性だってある。つまり、他人から見れば湊たちは闇の一族ということになり、面倒なことになるのは間違いないのだ。だから、この半年間は森の外にある街に入らず、ずっと森の中で過ごしてきた。

だったら、髪を染めたりカラーコンタクトを付けて、髪と目の色を変えればいいのではないか、ということになるのだが、それは無理な話だ。髪と目の色を変えることで五大貴族に成り済まして、何か悪さをする可能性があるからだ。そんなことがあれば一族の誇りに傷が付くと考えられたことで法律で禁じられた。そんな法律が決められたことで、全ての理髪店は髪染めを止めた。もちろん、森の外にある町の理髪店も止めているため、湊たちが髪の色を染めることは不可能。さらに、カラーコンタクトは既に店頭から消えているため入手は不可能。加えて、この法律を破ることは重罪に値するため自分からやろうなどという人もいない。やったとしても、自然型の超能力を扱えない時点でバレル。

結果的に、湊と奏は髪と目の色を変えることは不可能、ということになる。

話を戻すと、湊たちはサンテリア学園に編入するが、黒髪黒目ということで周りから闇の一族と勘違いされ、闇の一族Ⅱ（イコール）闇系統の超能力を扱う人間ということになる。残念ながら、湊たちの超能力は闇系統の超能力ではない。つまり『闇系統の超能力を持たない闇の一族の人間』という矛盾した評価になってしまい、人々の混乱は免れない。

「闇の一族に誤解されるのはどうもならん。諦めて騒がしい学園生活を送れ」

マーズが投げやりになるのも仕方ないと言える。
これには、対処のしようがないので『なるようになれ』ということになる。

「そっぴや、俺たちの能力はどうするんだ？ 婆さんの予想だと、俺たちの能力は『分類不可』なんだろ？」

湊たちの超能力はマーズの見立てだと5種類に属さない、世にも珍しい『分類不可』となっている。湊たちも5種類に分類される超能力の特徴を聞く限りでは『分類不可』だと思っている。

「はつきり言わせてもらうと、お主らの超能力は厄介過ぎる。学園では隠した方がいいじゃろ」

『分類不可』の超能力の数は自然型より圧倒的に少ないので、闇の一族が『分類不可』の超能力を持つなど一騒動が起こるのは間違いない。

「隠した方がいいって、急に言われても具体的にどうすればいいんだ？」

「それくらい自分で考えんかい」

「また投げやりだな。そうだな………マッスルアップー筋力強化でいいんじゃないか？」

「無難な能力じゃのう。マッスルアップー筋力強化を使う闇の一族か………大混乱は間違いないのう」

「『分類不可』よりまだマシだと思うけど。それに、筋力強化だつたら、多少なりと俺の体術が役に立つだろうし」

「私はどうすればいいのでしょうか？兄さんみたいに他の能力にこまかすなんてできません」

「奏は俺と同じ筋力強化だマッスルアップバーな。俺の能力を“もらい受けて”それで騙し騙しでやっていくしかない」

「それがいいじゃろな。手加減が難しいと思うが、毎日受けているから誤って暴発させることもないじゃろ。能力測定も目立たないように、無難なレベル4あたりの成績が妥当じゃろ」

「ちなみに聞くが、俺が鍛練しているときのスピードで能力測定をやつたら、どのあたりのレベルになる？」スキルテスト

あの朝の鍛練で湊がやった視認不可能なスピードだ。

「筋力強化の場合じゃと………少なくともレベル7・8はいくじやろうな。もしかしたら、レベル9はいくかもしれん」

「……基準低くないか？」

「お主らがおかしいだけじゃ。とにかく、目立ちたくないのなら能力測定は手を抜いておけ」スキルテスト

「分かった」

「分かりました」

以上から分かる通り、湊と奏にとってこの世界は、とーっつつてつもなく住み辛い、ということだ。2人が異世界から来た異分子だからかもしれない。

登場人物紹介 No.1

・名前
きりみやみなと
桐宮湊

・超能力
アウトブット
圧力起点

・紹介

中肉中背で顔は中の上くらい。

桐宮流武闘術の一番弟子で師匠の祖父とよく組み手をやっていた。

今は桐宮流武闘術と超能力を掛け合わせて更なる強さを見せている。

奏を1番に考える妹思いな兄。所謂、シスコン。

悩みは、奏の男性恐怖症。

・名前
きりみやかなで
桐宮奏

・超能力
スキルカウンター
能力返却

・紹介

容姿端麗。

昔は護身用程度に桐宮流武闘術を習っていたが、1年前からまた習

い始める。

極度の男性恐怖症で視線だけで背筋に強烈な悪寒が走ってしまう。男に触れられたときには禁断症状が出る。唯一許せる男性は兄の湊だけ。父と祖父は他の男同様に無理。今はリハビリ中で、現在の目標は家から駅まで泣き出さずに行くこと。

兄に一途な想いを捧げる妹。所謂、ブラコン。

悩みは、極度の男性恐怖症………ではなく、湊が振り向いてくれないこと。

・名前

マーズIIウェリトン

・超能力
オールスキャン
事象検査

・紹介

風の国の片隅にある森の中で暮らしている。湊たちを孫のように思っている。

優しくて世話好きなお婆さん。

・自動能力
オートスキル

無意識下で行う超能力のこと。本人の意向とは関係なしに起こる。

ON/OFFが可能。

もちろん、身に付けることは難しい。

・アウトプット圧力起点

圧力を操作する超能力。

分類不可。オートスキル自動能力を身につけているため予測レベル10。スキルデ能力測定をやっていないため、正式なレベル10ではない。

オートスキル自動能力は『相殺』。自分にかかった圧力に圧力で相殺する。

応用パターンはかなり豊富。

超能力が発現した頃に、マーズの超能力によりどんな超能力かが分かる。

・スキルカウンター能力返却

分類不可。オートスキル自動能力を身につけているため予測レベル10。スキルデ能力測定をやっていないため、正式なレベル10ではない。

相手の超能力を吸い取り、その超能力を倍増させて行使する超能力。オートスキル自動能力は『吸収』。触れた超能力を吸い取る。

超能力の威力や効果を倍増するため扱いが難しい。

湊に『能力者殺し』と謳わせた。

超能力が発現した頃に、マーズの超能力によりどんな超能力かが分かる。

・オイルスキャン事象検査

精神型。レベル9。

触れた人や物などに起こった事象や心などを読み取る超能力。サイコメトリー能力の延長線上にある超能力。読心

普段は育てた作物や畑の土の状態などに使っているため、毎年豊作。湊たちに初めて会った日、湊に手首を捻られたとき超能力を使い湊たちがどんな人物なのか把握した。自分たちが異世界から来たことを言われて、すぐに信じたのは既に超能力で知っていたため。

湊たちが超能力を発現したときに、真っ先にこの超能力で気が付いた。

第1話 サンテリア学園

湊と奏はサンテリア学園に向けて出発した。荷物は今まで着ていた服とか異世界に来たときに持っていたカバンくらいで大して大きな荷物はない。

今まで世話になったマーズとの別れは簡単に済ませた。これは一時の別れで、そのうちマーズの方から学園に来るとのことだった。ちなみに、湊は家を去る間際にマーズからこんな小言を言われていた。

「カナデのことはミナト、お主が守ってやるんだぞ」

言われなくても、元からそのつもりだ、と湊は答えた。その答えに満足したのかマーズは笑顔だった。

今、湊と奏が歩いてるのは森から出た町の街道だ。それなりに栄えているのか、道のあちこちには人がいる。異世界に来て、初めてのマーズ以外の人間だ。やはり、髪と目の色は違って同じ色の人はいなかった。五大貴族ではない証拠だ。

湊たちが着ている服はマーズから渡されたものだ。

湊はあまり目立たないような服装に加え、髪の色を隠すために帽子を深くかぶっている。傍目から見れば、怪しい男にも見えなくもない。

奏は髪が長いので、全身をローブで覆い隠している。湊からからす

れば、この世界とは無縁の魔法使いにも見えなくなかった。ローブ自体は珍しいものではないのだが、需要がほとんどないため着る人は少ない。町で見かければ「あの人、ローブ着てる」程度である。総じて言うと、2人は少し目立っている。黒髪黒目で目立つよりは断然マシであろう。

しかし、これは普通に歩いてたら話。

「に、兄さん……………無理ですう、死んじゃいますう……………」

「大丈夫。悪寒だけで死ぬような人はいないから。だから、頼む。泣き止んでくれ」

奏は湊の身体に抱き着いて泣いていた。それも大泣き。

ここに来て、奏の男性恐怖症が炸裂したのである。半年間も湊以外の男に会わなかったせい、町に出て男を1人見かけた途端にこれ（・・・）である。さらに悪いことに、奏が急に泣き始めたために視線が急に集まってきてしまっている。もちろん、集まってきた視線の中には男性もいるわけで、男性の視線だけで泣いてしまう今の奏はもつと泣いてしまい、そこからまた注目を集めて……………という悪循環に陥ってしまっている。

別の意味で視線に集めることになってしまった2人だが、やはり、闇の一族で誤解されて注目されるよりはマシな方であろう。

湊は奏を泣き止ませるために必死に慰めるようと髪を撫でたりと色々をやっているのだが、一向に涙が止まる気配はない。

半年間のブランクは相当大きいらしい。

このままじゃ埒があかないと思った湊は思い切った行動に出ることにした。

「奏、そのロープ、脱げないようにちゃんと押さえてろよ」

「え？兄さん、それはどういう――きやあぁっ!？」

湊の腕が奏の腰に回された瞬間に、奏の身体がグイッと空中に引つ張つられた。湊が圧力起点で地面を蹴ったのだ。圧力を操作したことで湊の足と地面の間に力が生まれ、その力が湊たちの身体を空中へと押し上げたのだ。

とにもかくにも、さっきまで湊たちに注目していた人たちは空へ跳び上がるという予想外の行動に出られたために、一瞬だけ見失ってしまう。思わず目で追ってしまいが、ジャンプを繰り返したのか既に距離が離れていた。もちろん、追いかけようとする人などいない。

逆に、ちよつとした罪悪感に苛まされていた。

いくらか少し珍しい格好をしているカップル、が理由は分からないが、彼氏が彼女を泣いているからと言って見すぎた。もう少し気を使つて、見て見ぬ振りをすればよかった。あのカップルは、自分たちの視線に耐え切れなくなつて能力まで使つてこの場を立ち去つたのだろつ、と考えた。

半分外れて半分当たっているような考えが町の人たちを共通させ、互いに苦笑いしながら、そそくさと元の生活に戻るものであった。

さて、湊たちは能力を使つて、駅の近くに来ていた。空から跳んできたために、ちよつと周りから視線を集めたが、そこは超能力の世界、すぐに視線は霧散した。

駅に来たのは、ここから走る電車に乗つて、サンテリア学園まで行くためだ。何度か電車を乗り継ぎをしなければいけない。

もちろん、これはマーズから事前に聞いていたことだ。

「すみません、兄さん。私のせいで」

跳んでいる間に少しは泣き止んだのか、涙を目元で溜めている奏が謝ってきた。

「このくらい問題ないさ。それより、悪化した男性恐怖症の方をなんとかしてくれ」

「は、はい。頑張ります」

奏が両手で握り拳をつくって気合を入れる。その様子に、湊は少し微笑みながら奏の頭に手を乗せて撫でてやった。それを、奏は目を細めて気持ち良さそうに受け入れていた。

しかし、この笑顔とは裏腹に、湊に抱き着ける大義名分である男性恐怖症を奏をあまりどうこうする気はない。とは言って、自分でも厄介なことだとは思ってる。だから、治ったらいいな―程度の気持ちだった。

駅で走っているのは電車は『電気で走る車』の如く電気で動いている。超能力で雷や電気があるのだから、科学で証明されていてもおかしくはない。

湊の見解は、この世界の科学は地球の科学には追いついてはいないが、それなりには進んでいる、というものだった。

湊たちはマーズから借りたお金で切符を買って改札口に向かった。改札口には切符を通す機械などではなく駅員が立っていた。駅員に少

し訝しい目で見られたが、問題なく改札口を通った。

そこからは、電車に乗り継ぎしながら目的地のサンテリア学園に向かう。

電車を乗り継ぎした湊と奏は、無事にサンテリア学園に着いた。2人の目の前には大きな門がある。さらに、元の世界ではめったにいない門番までいた。ちなみに、奏は門番が男のために必死になって湊にぺたりと抱き着いていた。

「サンテリア学園の編入生です。通させてもらえますか」

湊はそう言つと、門番2人がすごい疑うような表情をしてきた。

「そこを動くな。今、確認する」

お前らは信じられないと暗に言っているような口調に湊たちは眉をひそめた。第1印象は最悪だ。

門番の1人が備えつけられている電話でどこかにかける。

「……………はい、分かりました」

門番が受話器を戻すと、こちらに来た。

「どうでしたか？」

「確認が取れた。今から迎えが来るから、そこにいてくれ、とのとだ」

とりあえずは、確認が取れた。これに湊たちはホツとする。これで編入の話はないなどと言われた日には、ここまでの旅路は何だったのか、ということになる。

数分して、1人の女性が来た。

眼鏡をかけた知的な女性だ。金髪に青い目をしている。

「マーズ様から紹介のあったサンテリア学園の編入生ですね。校長室に案内します、こちらへ」

女性が、マーズ様という言葉を言ったら門番2人が驚いたような表情をした。

女性はそれに構うこともなく、身体を翻して学園の方に歩いて行く。湊たちも慌ててそのあとを追った。

さて、サンテリア学園に入った湊たちだが、今はサンテリア学園の外装に驚かされていた。

「兄さん、城が6つもありますよ」

「すごいな。こんな光景そうそう見れるもんじゃないぞ」

奏が言った通り、湊たちの目には城とも呼べる建物が6つ映っていた。距離は離れているのに、目に見えるほどの大きさだった。

「あの6つの建物は、サンテリア学園の校舎です。6つもあるのは

生徒たちを出身国ごとに分けるためです。校舎には名前がありまして、例えば火の国出身の生徒が集まる校舎は火の塔と呼ばれています」

軽くサンテリア学園について説明してもらいながら、湊たちは校長室があるサンテリア出身の生徒が集まる太陽の塔へと足を踏み入れました。

第2話 校長室

女性に案内された湊と奏は校長室に入った。部屋には、外見だけで言えば、赤髪緑目の20代後半か30代前半の男性がソファに座っていた。その奥には、校長のなのか立派な机がある。

「待ってたよ。さ、ソファに座って。フィルネ君は2人に何か飲み物を」

校長らしき人物に促された湊たちは対面するように革製の高級ソファに座った。

ここまで案内してくれたフィルネという女性は壁側に設置してある小型のキッチンに向かう。

「さて、僕の名前はラウデラ・ウェリトン。このサンテリア学園の校長を務めさせてもらってるよ」

目の前の校長がウェリトンという姓に湊たちは驚いた。ラウデラはそんな2人を見て微笑を浮かべた。

「そして、ここまで君たちを案内してくれた彼女は僕の秘書のフィルネ・カーアトラだよ」

ちょうど飲み物を持ってきたフィルネをラウデラが紹介する。彼女は一礼して、ソファの後ろに立つ。

「君たちの名前は、ミナト・キリミヤ、カナデ・キリミヤの兄妹でいいのかな？」

「はい、そうです」

名前を確認されたところで、湊は帽子を取る。

自分が黒髪黒目が他人にバレてしまうが、学園に通う以上はごまかし切れない。

「その髪と目は、染めたりカラーコンタクトしてるわけじゃないんだね？」

「これは地毛です。信じられないかもしれませんが」

「別にそういうわけじゃないよ。ただ、私も黒髪黒目を見るのは初めてなんで、驚いていたただけだよ」

ラウデラは落ち着いた様子で言った。

「2つ質問なんだが、君たちは闇の一族とは何の関係もないんだね？」

「関係も何も、俺たちは生まれたときから闇の一族ではありません。生まれも育ちも南の大陸です」

「なら、よかった。これで、君たちをこの学園に編入することができる」

ラウデラは淡々と言うが、湊は腑に落ちなかった。

「簡単に信じていいんですか？」

黒髪黒目なのに闇の一族ではない。この世界において非常識な出来

事にも関わらず、ラウデラは口答質問しただけで、それをあつさりと信じた。

湊は何かあると思った。

「それを聞くってことは、私が何か企んでいると思ったのかい？」

ラウデラは湊の心中を読み取った。

「特にないよ。まあ、理由を言うなら、裏付けがあるから君たちを信じたってことかな」

「裏付け？」

「そう。母さんから君たちのことは聞いてるからね。母さんの能力は知ってるだろ？」

マーズの能力は事象検査^{オールスキャン}。触れた人や物に起こったこと、考えていることなどのあらゆる情報を読み取る能力だ。

「はい。確か——」

「おっと。あまり他人の能力を言わない方がいいよ。能力はその人のアイデンティティ。他人がどうこう言うものではないよ。と言っても、全部母さんの受け売りなんだけどね」

「あ、すいません」

湊は慌てて謝る。

「常識に疎いのも聞いているから別にいいよ。次から気をつけてく

ればいい」

一体、どこまでのことをマーズから聞いているのか、と気になるところだが、そこは口をつぐむ。

「最後に質問なんだが、君たちの能力は何？」

「マッスルアップ
筋力強化です。俺たち2人とも」

「マッスルアップ
兄妹揃って筋力強化なんだね。授業大変だろうけど、頑張って」

「授業が大変？」

「それは授業を受けてからの楽しみってことで。さてと、事務的なことは終わり。ここからは、僕の個人的な質問だよ」

ラウデラはテーブルに広がっていた書類を手早く片付けるとテーブルの隅に置く。

「ラウデラ校長。口答質問が終わっても、学園生活についての説明をまだされておりません」

フィルネがすかさず口を挟む。
有能な秘書なのだろう。

「あーそうだったね。それは…… フィルネ君が後で説明しといて私的にはこっちの方が大事だし」

そんな適当でいいのか、校長。

「畏まりました。寮に案内間で説明します」

それを了承していいのか、秘書。
などなど内心突っ込みながらも、湊は口には出さない。

「頼むよ。ところで、ミナト君」

「はい、何でしょうか？」

「僕、何かしたのかな？さっきから、カナデちゃんがこっちを見向きもしてくれないんだけど」

名前が出た瞬間、ビクツと湊の身体が震えた。

ラウデラの言う通り、湊はこの部屋に入ってから1回も視線を向けていない。ソファーに座ってから、ずっと湊の隣にピタリと寄り添い、顔は常に湊の身体に押し付けていた。

「ちょっと、人見知りなだけです。できるだけ、湊の方は向かいであげて下さい」

本当は人見知りなんていうレベルではないが。

「挨拶くらいはしたいんだけどな。何とかならない？」

「……………分かりました。湊、校長に挨拶して。いつまでも、そうやってるわけにはいかないだろ」

「む、無理です……………」

奏が身を縮めて、更に湊の方に擦り寄る。

「手繋いでてやるから挨拶するんだ」

「わ、分かりました」

奏の両手かは湊の片手を握る。その手は少し震えている。

その様子を見ていたラウデラは、自分ってそんなに嫌われてるのかな、と思っっていたりする。

湊の手を握ることで少し安心感を得た奏の顔がラウデラの方をゆっくりと向く。

「ッ!」

奏とラウデラの目が合った瞬間に、奏の顔が超高速で湊の方を向く。明らかな拒絶を示した行動だった。

「え、えつと……カナデちゃん？僕のことそんなにダメ？」

あまりにもあからさまな拒絶の仕方に戸惑いを覚えるラウデラ。ラウデラ自身、女性から、顔を見るのも嫌、なんていう拒絶のされ方はされたことはなかった。顔も世間一般から見れば、不細工というよりはイケメンの方だろう。

奏の態度にショックを受けたラウデラにさらなる追撃が加えられる。

「せ、生理的にダメです……………」

グサァッ!とラウデラの心に大ダメージを与える。まさか、年頃

の少女にそんな理由で拒絶されているとは思っていなかった。

隣で見ていた湊は元の世界と同じように（・・・・・・）男性を拒絶する奏に溜め息を付く。

「校長。すいません。こういうことなんで、そつとしいてやって下さい」

「……ま、いいよ……………人の好みもそれぞれってことだよね……………」

哀愁が漂うような台詞に、湊は苦笑いする。

「気を取り直して……………母さんは元気だったかい？」

ラウデラは何事も無かったように話を再開した。

意外と心はタフなのかもしれない。とかそんなことは無く、後ろで控えているフィルネにはただの見栄だと看破していた。

「元気でしたよ。婆さん……………じゃなかったマーズさんにはお世話になりました」

「別にいいよ、祖母さんで。母さんは君たちのことを孫のように思ってるらしいからね」

2人の言っている『ばあさん』の字が違うことは誰にも分からない。

「それにしても驚いたよ。いきなり手紙で、孫を編入させたいから手続きよろしく、って来たからね。僕なんか結婚してないから、子供いないのにだよ」

「そうですか……………」

湊は色々とマーズについて聞かれた。どういふ経緯でマーズと知り合ったのかとかだ。ちなみに、この質問には湊と奏が森で捨てられていたところをマーズが拾ってくれた、という嘘八百な解答をした。

質問を始めてから15分後。

「あ、そうそう。何か要望とかある？今なら聞いてあげてもいいよ」

ラウデラ曰わく、マーズからできるだけサポートしてやれ、と言われてるらしい。

「そうですね……………」

マーズにこき使わされているラウデラに申し訳ないが、湊は真剣に考え始める。

学園側が要望を聞いてくれるのだから、最大限に使いたい。とは言っても、学園のシステムを知らない湊には特に思いつかない。

「あ、別に後でもいいよ」

それに気付いたラウデラは慌てて言うが、湊の耳に入らなかった。

思い付かなければ、思い付かせる状況を想像すればいい。

まずは、登校風景。奏と一緒に学園に行くところを想像する。早速、問題点発見。奏が泣きそうな表情しているのが目に浮かぶ。元の世界同様これは仕方ない。奏には頑張ってもらおう。

次に、教室。湊と奏は編入生だから、自己紹介しなくてはならない。

クラスメートの前に立つところを想像する。また問題点発見。奏が今にも泣きそうだ。原因は分かっている。クラスにいる男子だ。黒髪黒目の編入生が珍しいのだろう。こちらを凝視しているに違いない。

ふと、隣にいる奏に目を向ける。奏も同タイミングでこちらに目を向けてきた。奏が湊に抱き着くような格好でいるため、2人の顔の距離は30センチもない。

奏の目の涙腺には、涙が溜まっていた。男性恐怖症は絶好調のようだ。

半年というブランクがあつて、男性恐怖症が悪化している奏をクラスに置くのは身体に毒だ。教室にいる間、ずっと涙目なのが容易に想像できる。

湊は要望を決めた。
ここで、奏に一言。

「奏、顔が近い」

「わ、わわわ……ッ!!」

あと10センチつてところで、奏が慌てて顔を離す。その顔は紅く染まっていた。

湊が思考している間に奏が何を思ったのか徐々に近づいてきたのだ。

「君たちって、そんな関係？」

「違います」

ラウデラの誤解を即座に否定する。

「要望いいですか？」

「もう決まったのかい。どんと来なさい」

「じゃあ、遠慮なく。俺たちが入るクラスは、女子ができるだけ多いクラスにして下さい」

クラスに女子が多ければ、奏の負担も少なくなる。まずは、奏には登下校から頑張ってもらおう。教室くらいは楽にしてもらいたい。

これは奏を第一に考えた湊の要望だった。

「ミナト君。僕はこの学園の校長になってから、たくさんの生徒を見てきたよ」

急に何を話してんだ、と湊は首を捻る。

「でもね。自分は女好きだから、女子ばかりがいるクラスに入れて下さい、なんて言う生徒はいなかったよ」

ここに来て、ようやくラウデラの言いたいことが分かった。

ラウデラの言う通り、自分の台詞を思い返すと、ただの女好きの台詞だ。

「ち、違い——痛っ！」

あらぬ誤解を解こうとする湊に腹を抓るような痛みが走る。誰がやってるのは分かっている。

「兄さん……………」

犯人は奏。怒った顔で湊のことを見上げながら、片手で湊の腹を抓っている。

こちらもラウデラと同じ誤解をしているらしい。

「奏、違っんだ。俺は奏のことを考え——」

「その要望、聞いてあげてもいいよ」

「……………え？」

ラウデラの言葉に湊は驚いた。

あんな誤解させといて了承されるとは思わなかったのだ。

「いや、ここは聞いておかないと、後で母さんに何か言われそうだからさ」

「校長は婆さんが怖いんですか？」

「怖いね。言うこと聞かないと、昔の恥ずかしい話とかを暴露されそうだし。あ、だからってクラスの女の子をナニかしちゃダメだよ。ナニかした瞬間に、君をどっかのクラスに飛ばさなきゃいけないんだから」

「わ、分かってますよ。それと——」

ラウデラの誤解を解こうとすると、口を開くと、

「ああ、ちょっと話し過ぎたね。フィルネ君、ミナト君とカナデちゃんを家に案内してあげて。その途中で説明も忘れずにね」

話は終わってしまった。

奏がまだ怒っている。後で誤解を解くことにする。

「了解しました。ミナトさん、カナデさん、こちらへ」

誤解を解くタイミングを失った湊はソファアを立ち、フィルネがいる部屋の出口に向かう。奏も湊の後ろに続く。

「校長、ありがとうございました」

出口の手前で止まった湊はラウデラの方を振り返り礼を言った。奏も湊に合わせてお辞儀をする。

「いって、そういうのは。元々、母さんに頼まれたものだから断るにもいけないしね。2人に楽しい学園生活ができることを願うよ」

そう言いながら、ラウデラはヒラヒラと手を振った。湊たちは歩を出口に進み始めた。既にフィルネは部屋の外で待っている。

そして、部屋を出た直後、湊と奏に強烈な重力が襲いかかった。

「——ッ!!」

第3話 重力操作

急に湊の身体が重くなった。

足が支え切れず、ガクツとの膝が折れた。湊の身体が床に打ち付けられる。

オートスキル自動能力『相殺』のおかげで打ち付けられたときの痛みはない。

オートスキル念のため、自動能力をONにしていたのが功を奏した。

オートスキル自動能力は人の無意識下で行われる超能力のこと。

人が、寝ているとき、つまり無意識下のとき、に能力は行使されるだろうか。答えは否である。能力は手足を動かすのと同じように脳が『能力を使う』という信号を発していないと行使されない。

オートスキルそれに対して、自動能力にはそんな理屈は通用しない。ある条件の下で脳もとの信号とは関係なしに起こる。ある意味一種の条件反射と言える。

オートスキル湊の自動能力『相殺』は圧力を圧力で相殺する。湊の身体が床に打ち付けられたときに起きた、身体から床に対する圧力と同時に起こる、相互・反作用による、床から身体に対する圧力（これが痛みの要因となる）は『相殺』で打ち消されてしまったため痛みは発生しない。ちなみに、湊に腹を抓られて痛みが出たのは、オートスキル自動能力『吸収』で湊の『相殺』を文字通り吸収されて、意味を為さなくなってしまったからである。

要するに、今の湊は重力で床にめり込めるような痛みはないが、身体が鉛のように重くなり動けない状態にある。

「に、兄さん!？」

反対に、奏は何ともない。

湊が床に潰れたのに対して、隣で平然と……ではないが、取り乱しながらも立って倒れている湊のことを心配している。

ここに来て、奏の能力が発揮したのだ。

奏は身体の中に『何か』が流れ込むを感じた。超能力。この重力が超能力によって起こされていることに気付いた。

奏の『吸収』の発動条件は、奏自身に超能力が触れる・作用すること。吸収した超能力は無効果され、奏の中に蓄えられる。さらに、蓄えられた超能力は能力返却により倍増されて奏に行使される。

これが、湊に『能力者殺し』と言わせる理由である。

「あれ？ミナト君は倒れて、カナデちゃんは倒れないのかい？」

この重力を引き起こしたラウデラが驚きの声をあげる。

その声に奏が振り向き、兄を傷付けた報い、と言わんばかりに、吸収した重力を能力返却スキルカウンターで倍増させてラウデラに叩き込もうとすると、

「止める、奏。俺は大丈夫だ」

超能力を発動させる一歩手前で湊の声が割って入った。倍増された重力は不発に終わる。

湊は口を動かして“俺に任せて”と伝えた。奏はコクツと小さく頷く。

でも、重力で床に縛り付けられる兄を見るのは嫌なので、奏は湊の身体に触れて、湊にかかる重力を全て吸い取る。これで湊の重力は消え去る。とは言っても、さっきから湊と奏には継続的に重力がかかっているのです、ずっと吸収していなければならぬ。

身体が軽くなった湊はそのまま動かないで、重力がかかっている状態と同じ態勢でいる。

「校長、これはどういうことですか？先程の言葉からすると、この身体の重みは校長がやっていることになるのですが」

「その通りだよ。君たちに重力をかけているのは僕だよ」

「……………どういふつもりですか？」

「ちょっと試してみたかったんだ。要するに、ただのイタズラさ」

呆気ない理由が返ってくる。

これ以上、聞いても真意は聞き出せないと思った湊は話を進めることにした。

「とりあえず、この重力を解いて下さい」

「そうだね。悪い、悪い」

ワザとらしい返事を耳にしながら、湊は奏に目を向けた。奏は湊の身体から手を離して、もう重力がかかってないことを伝える。

「この重力は校長の能力ですか？」

身体を起こして立ち上がる湊はラウデラに聞いた。

「そうだよ。僕の能力は干渉型・重力操作。グラビティプレス人や物の重力を操作する能力さ」

「便利な能力ですね」

「まあ、ちよつと使い勝手が悪いんだけどね。ところで、質問していいかな？」

「……………ダメと言ったら、どうするのでしょうか？」

「質問する」

「それは聞く意味がないでしょう」

「マッスルアップ何で筋力強化のカナデちゃんは倒れなかったんだい？」

「……………ッ」

これが、湊がこの状況下で1番に危惧していたことだ。

湊と奏は自分たちの能力を隠している。マッスルアップ筋力強化という能力はただの肩書きに過ぎない。

アウトブット 圧力起点と能力返却 スキルカウンター

これら能力は世界でただ1つ。

加えて、強力かつ異質。

2人の能力がバレることは混乱を招く要因になる。ただでさえ、黒髪黒目で周りを騒がせているのに。

バレたくないのなら、オートスキル自動能力の『相殺』や『吸収』を解けばいいのではないか、という話になるのだが、湊はあまり好ましく思っていない。

自分はいいいとしても、奏は良くない。

万が一、さっきのように不意打ちという形で重力をかけられては華

奢な身体である奏が傷付く。奏にはそんなくだらない理由で傷付いて欲しくはない。

この事はマーズの家を出かける前に話し合ったことで、最初は、少しでもバレル要因を減らそうと、自動能力オートスキルを奏がOFF、奏がONで行こうと提案したのだが、奏が「兄さんだけ傷付くなんて嫌です！」と猛反対されて2人は自動能力オートスキルをONにしてここまで来た。

話を戻すと、不意打ちでかけた重力に奏は何で耐え切れたのか、という話。

能力をバラしたくない湊と奏はシラを切ることにした。

「能力を発動していたんじゃないでしょうか？」

湊はすぐに答えた。

実際のところ、この解答は苦しい。

湊にかけられた重力は身体を倍以上の重さにした。

それを筋力強化で耐えたともなれば、かなりの高レベルの能力者となる。だが、これは「奏の能力はレベルが高いんです」と言えば何とでもなる。後の能力測定スキルテストでそれなりの成績を出さなければいけないのだが。

他にも理由はある。

「じゃあ、何で能力を発動していたんだい？」

能力を発動していた理由だ。

普通は校長と会うのに、能力を発動する必要はない。だから、それなりの理由が必要となってくる。

目を奏の方に向けてみれば、大丈夫です、奏が目で語っていた。

兄妹のアイコンタクトは色々と便利だ。

「何でだ、奏？」

敢えて奏が聞いた。

「校長が私に目を向けたときに殴り飛ばそうかと思ひまして」

「……………」

男性恐怖症の奏らしい理由だった。

（この理由ってマジだったんじゃないのか…………？）

少なくとも、奏はほぼ真剣にそう思った。

「……………カナデちゃんが僕のことをどのくらい嫌いなかがよく分かったよ」

ズーンと気落ちするラウデラ。

（とりあえず、ごまかせたみたいだから結果オーライってことで）

どんな方法であれ、この場を乗り切ったのだ。

「ラウデラ校長。そろそろいいでしょうか？」

「引き止めちゃって悪かったね。フィルネ君、あとは頼んだよ」

「畏まりました」

部屋を出た湊と奏はフィルネに連れられて学生寮に向かった。

第4話 兄妹の家

校長室を出た湊たちは案内役であるフィルネを先頭にして校舎から進んで、何回か曲がったところにある並木道を歩いていた。

今の奏は湊の腕に抱き着いたりはしていない。周りに男がいない以上、やる必要はないからだ。

「兄さん、すいません……………」

「気にしないでいいよ。俺のために怒ってくれたんだろ？」

校長室では、湊が重力をかけられたことに怒った奏が危うく能力を使うところだった。使う寸前で湊が止めたが、あと少し遅かったら奏はラウデラを報復していたのだろう。

骨折程度では済まない威力を持つ重力でだ。

そして、もし、あの場で奏が能力を使用していたら面倒なことになっていたに違いない。

「これからは気をつけてくれればいいよ」

「はい！」

奏がニッコリと笑顔で返してきた。

反省しているのか微妙なところだが、笑顔で返されては言う言葉はない。

つくづく妹に甘い兄である。

その笑顔を見ながら湊は考える。

いつまで、これをやっていけばいいのだろうか。出生や能力を隠して過ごすことになるこの生活を。

能力を制限されることは湊にとつては多少の我慢で済む。実際のところ、普段の鍛練で使っているためそんなにストレスみたいなものは溜まらない。筋力強化と偽っているが、あんまり能力の効果自体は変わらない。過程は大きく違うが。

奏はどうだろうか。湊と同じように能力返却を筋力強化と偽っているため、単一の能力、力の加減等々と湊より制限がかかっている。いつか、自由とは言わないまでも、ある程度は使えるようになるだろう。

（ああ、そうだ。鍛練の場所どうしようつか……………）

「ところで、兄さん」

「ん？何だ？」

「女子ばかりいるクラスに入りたい、とはどういうことですか？」

きつちり覚えていたらしい。

さっきの一悶着で右耶無耶になっていたと思っていたが、奏は忘れていなかった。

湊は冷や汗を垂らしながら弁明を始める。

「奏が『アレ』を以前にも増して嫌っているから、教室くらいは安心地帯をと思ったただだよ。女子ばかりなら当たり前のことながら『アレ』は居ない、俺は除いてね。前みたいにピリピリしながら警戒しなくていいだろ？」

『男』という言葉だけでも敏感に反応してしまうので『アレ』と言葉を替えておく。

「じゃあ、あの要望は私のために………？」

「そういうこと。まあ、奏が誤解するのも仕方ないさ。今、思い出してもあの言い方は誤解しか生まないな」

「ありがとうございます、兄さん」

「誤解が解けて何よりだ」

「でも、兄さん。周りに女子ばかり居るからって鼻の下伸ばさないで下さいよ」

ちよつと頬を膨らましながら言う奏。

冗談を言っているような言い方だが、目は真剣そのものだ。

「大丈夫。俺は奏が隣に居る限り他の女子に靡いたりしないよ」

「じゃあ、一生、兄さんの隣に居ます」

「男としては嬉しい言葉だけど、兄としては悩み所のある言葉だな」

告白もしくはプロポーズまがいの言葉を言い合つところが色々と問題だが、この兄妹にそんなことは些細なこと。補足しておく、奏の顔は真っ赤だった。

『仲が良いのね、ミナト君とカナデちゃんは』

誰だろうか。

この会話を聞いていて「仲が良い」という言葉で片付ける人は。

「……ッ！」

突然、頭の中に聞こえてきた声に思わず身構えてしまう。

奏はうん？と湊の行動に首を捻っていた。奏には声が聞こえていないらしい。でも、念話伝達テレパシーが自分に対して使われているのは分かっていた。

（この声、どこかで………？）

『そんなに警戒しないで。話しているのはあなたたちの目の前の人よ』

言われた通り、前を見てみるがフィルネしかない。

「えっと……この声はフィルネさんですか？」

『そうそう。こうやって話しているのは、私の精神型・念話伝達テレパシーのおかげなのよ』

湊は問答しながら、奏に自動能力オートスキルを切れ、とアイコンタクトを送る。奏はすぐに『吸収』を切ると、頭の中に声が聞こえてきた。

『ビックリさせてゴメンなさいね。でも、校内放送がいきなり頭の中に聞こえてきたら驚くでしょ？だから、事前にね』

校内放送と言っても、行事や集会などの事務的なことで使われてい

て、それ以外のことは各先生が放送室から放送することになっている。

「それはそうですよ。今だって驚いているんですから」

『ふふふ。驚かしてゴメンなさいね』

「ところで、口調がさっきとは全く違うのですが。こっちが地ですか？」

今のフィルネの口調は校門で会ったときと校長室にいるときとは全く違った。

『そうよ。普段、会話するときにはあの口調なの。秘書として板に付いちちゃったのね』

文章上は普通に会話をしているように見えるが、実際はフィルネがテレバシー念話伝達を使って話しているので、他者視点からだと湊が一方的に話しかけてフィルネに無視されている構図が出来上がっている。

「ところで、家ってどういうことですか？」

今度は奏がフィルネに質問した。

2人はマーズから学園に寮があることは聞いていたため、てっきり自分たちもそこに住むのだろうと考えていたのだが、ラウデラの口から出た言葉は寮ではなく家だ。

『普通なら貴族でもない人は寮に住むことになるんだけどね』

この学園は五大国という大きなスポンサーがいることで成り立って

いるところが大きいため、どうしても五大貴族の子供たちを特別扱いとなってしまう。そのため、希望でも無い限り寮には入れずに一軒家、それも大邸宅に住むことになっている。

逆に貴族ではない平民は家を買えるほどの金をボンと用意できるはずもなく、子供は寮に住むことになる。普通の家庭なら出費が安く済むのであれば、それに越したことはないだろう。

『でも、あなたたち2人は例外。黒髪に黒目というスタイルから周りの生徒は闇の一族と間違ひなく誤解するわ。例えあなたたちが闇の一族ではないと言ってもね。正直、未だに私もあなたたちのことを闇の一族じゃないと信じ切れてないわ。まあ、マーズさんが保証してくれてるなら本当なんだろうけどね』

この世界では髪と目の色は一族の象徴を現すもの。子供なら誰でも知っていることだ。

究極的に言ってしまうえば、誰がどう見ても男性という性別なのに本人は男ではない、と言っているような常識の矛盾が起きている。病気や手術云々は抜きにしてだ。

『あなたたちが寮に住むと他の生徒たちに動揺するのは間違ひないわ。もしかしたら、異端視する生徒だっているかもしれない。闇の一族が何でここにいる、とかね。だから、寮ではなく、生徒との接触の機会を少ない一軒家にしただけ』

要するに、生徒たちとのイザコザをできるだけ無くすために、2人のために一軒家を用意したということだ。

「何か色々とすみません。俺たちのために」

『気にしないで。家だって余ってたものだし。実質、あまり苦勞な

んてしてないもの』

そう言ってもらえるならと湊としても気が楽だった。

サンテリア学園は大きく6つのエリアに分けられる。

火の国の子供たちが通う、レッドエリア。

水の国の子供たちが通う、ブルーエリア。

雷の国の子供たちが通う、イエローエリア。

土の国の子供たちが通う、ブラウンエリア。

風の国の子供たちが通う、グリーンエリア。

サンテリアの子供たちが通う、サニーエリア。

エリアの位置は、サニーエリアを中心にして、その周りを5つのエリアが囲うような形になっている。言わば、サンテリア学園は南の大陸を縮小したようなものだ。6つの国の人間が生きる南の大陸と同じ。さらに、もちろん広さも半端ない。南の大陸の1割〜2割も占めている。ちなみに、湊たちが門から入った場所はサニーエリアであり、駅から降りた時点で既にサンテリア学園に入っていたりする。

1つのエリアには、馬鹿みたいに大きい校舎と生徒の住む居住区と買い物や娯楽をするため区、という3つの区がある。

居住区には、幼等部から高等部までの暮らす生徒の寮や一軒家がない。寮はある程度は無料で済むため需要を考えると普通は寮暮らしを取る。比べて、一軒家は水道代や光熱費などで一介の学生に住めないような金額になってしまう。たまに、小さい子供の心配な保護者が住むこともある。

そして、これから湊と奏が通う場所はサニーエリアにある校舎だ。これはラウデラの独断で決めたこと。何故かと言うと、目の届く範囲に置いておきたかったというのもあるのだが、サニーエリア以外のエリアにはそれぞれ貴族がいるため貴族の影響力が強い。もし、闇の一族と疑いのある湊たちを他のエリアに編入させると高確率で貴族が尋問をするだろう。知らないことを知っていると決めつけてだ。その点、サニーエリアには貴族は居ない、居るのは平民だけで誰かに命令されることもない。例えば、五大貴族がサニーエリアにいる湊たちを何かしようとしても、うちの国民に何か用か、と突っぱねることもできる。

ゆえに、中立国サンテリアは五大貴族の不可侵領域とも呼ばれている。

「ここが、ミナトさんとカナデさんの家です」

フィルネに案内された家は、校舎から15分くらい離れた2階建ての一軒家だった。周りに家は無く、両端と後ろを林で囲まれ、唯一林が無い正面玄関からは湊たちが歩いてきた並木道が続いている。中に入ると広々としていた。キッチンやテーブル、冷蔵庫、電子レンジ、テレビまで揃っている。

どうやら、家具一式はあるようだ。

物件としては、良い方と言える。

「いいんですか？本当にこの家を俺たちだけで使って」

「はい。この家はミナトさんとカナデさんのものです。ですから、好きに使ってくれて構いません」

秘書モードのフィルネが答えた。

家の中を一通り見た湊と奏は制服の試着をすることになった。

制服は事前に学園側が家に用意していたものだ。サイズはマーズから聞いていて、湊たちに合うように作つてあるとのことだった。

万が一、サイズが違つたら作り直さなくてはならない。そのための試着なのだが……………。

シュル、シュル、シュルシュル……………バサツ。

後ろから（…………）布と布が擦れ合う音と布が床に落ちる音が聞こえてくる。

湊の後ろで奏が制服に着替えているのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8931u/>

桐宮兄妹と超能力の世界

2011年12月31日06時49分発行